九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本に於けるシェイクスピア紹介の歴史(明治十五年迄)

豊田, 實

https://doi.org/10.15017/2557137

出版情報：文學研究. 1, pp.123-152, 1932-03-10. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

日本に於けるシェイクスピア紹介の歴史（明治十五年迄）

豊田實

日本へ來た最初の英國人として知られて居るウィリアム・アダムズ、即ち三浦按針がオランダの商船 de Liefde（愛號）に乘り、殆んど漂着の形で九州の一角に上陸したのが慶長五年即ち西暦一六〇〇年であり、其後アダムズ等の盡力によつて平戸に英國商館が設けられるに至つたのが慶長十八（一六一三）年であつて、日英關係史上における是等の特筆すべき出來事はシェイクスピアの存命中に起つたのであつた。然しアダムズが家康の親任を得て三浦半島の逸見に采地を貰つて居たことは、平戸の英國商館長コックスの日記及びアダムズ自身の書翰から知ることができ、家康が彼から數學を敎はつたことも彼の書翰に記されて居り、又英船長ヂョン・セアリスが日英通商開始の使命を帶び、ヂェイムズ王の國書なるものを齎して日本へ來た時、それを按針が先づ假名に譯したことは、それをもとにしたと思はれる漢字交りの譯文と共に、金地院崇傳の『異國日記』中に傳はつて居り、且つ平戸の英國商館には、マレイ語がよくできて英語も多少わかつたと思はるゝヂョン・ヂャポンを初めとして、三名ばかりの日本人通譯が居たにも係らず、この時代にはまだ英語が日本で行はれるやうな氣運には

ならなかつた。さうして折角開かれた平戸の英國商館も、それより數年前同所に開かれて居たオランダ商館の勢力に壓倒せられて、十年の後即ち元和九（一六二三）年には閉鎖するの止むなきに至つたが、アダムズはそれ以前に既に日本の土と化して居た。其後も英國は日本との通商を回復しようとしたが、其目的は達せられず、吉利支丹迫害となり、天草の亂となり、鎖國となり、日英通商の復舊は遂に安政年間迄押し延べられることゝなつた。

斯る次第でシェイクスピアの存命中に折角日英の兩國が一旦握手したに係らず、英國のこの文豪の名前すらも日本へは容易に傳はらなかつた。

然るに日本の洋學と言へば殆んどまだ蘭學の獨舞臺であつた文化七（一八一〇）年の正月江戸の市村座で上演された『心謎解色絲』といふ勝俵藏（後の鶴屋大南北）及び二世櫻田治助の合作（但し當面の問題たる綱五郎對お房の部分は南北によるとのことである）とシェイクスピアの『ローミオー、アンド、ヂューリエット』との間にかなりの類似點のあることが、批評家の注意に上つて居る。例へば『早稻田文學』の沙翁記念號（大正五年四月發行）においては伊原青々園氏が「日本における沙翁劇」なる興味深き一文中において、前記の二つの劇の間の類似を說明されて、「此れだけの筋を話せば、此の劇が沙翁の『ロメオとジユリエット』の翻案である事は誰にも考が附くでせう」と述べられて居る。是等二つの劇の間にはかなりの類似がある。一方が赤城家といふ武家と町人の家糸屋とを對立せ

しめて居るのに對して、他方はモンテギューとキャピュレットといふヴェローナの舊家を對立せしめて居り、ローミオーと是に當る綱五郎とは共に逐放の身となり、花嫁になる筈のお房とデューリエットが共に魔醉劑のために暫時假死狀態に陷り、その毒藥の調合者としては僧のロレンスと醫者の東林がある。且つお房は知らずして毒藥を呑まされて二十四時間假死狀態に陷り、デューリエットは自ら知つて服藥して四十二時間眠つたこと、又シェイクスピアの方では悲劇であるのが、南北の方では喜劇になつて居ることなどは却つて「換骨奪胎の妙」を得て居るとも考へ得られるであらう。而して若しこれら二つの劇の間に關係がありとすれば、伊原氏も想像され、且つ竹村覺氏が昨年の秋東京で開かれた日本英文學會大會の席上で說明された如く長崎出島の蘭館で或は其頃演ぜられたかもしれぬ『ローミオー、アンド、デューリエット』の筋が南北の耳に入つたと想像するのが最も眞に近いであらう。然しこの頃果して出島の蘭館でシェイクスピア物が演ぜられたかについてはまだ確實に知られて居るわけではない。但しこの二つの劇の間の關係に就いての井原氏其他の言葉に對しては、私は充分の尊敬をもつものであるが、それが確說となるためには、筋のあの程度迄の類似の外に、なほ動かす可らざる歷史的事實の發見が欲しいと思ふのは强ち私一人ではないやうである。

序に言つて置くが、『心謎解色絲』の中でお房が飲まされた毒藥の効果は二十四時が間あるものとされて居るが、之は一刻を上下二時に數へての二十四時、即ち今の二十四時間であるらしく、實際劇の梗概を調べて見ても、その藥を飲まされたお房は二十四時間後に綱五郎によつて蘇生させられて居る。ところが是と考へ合せられるのは瀧亭鯉丈作の『花曆八笑人』三編追加下の中で眼

七が「人水中に死して廿四時が内は蘇生すと、論語に出てゐるはサ」と言つて居ることである。論語は言ふ迄もなく出鱈目であるが、この廿四時はやはり今の時間の二十四時間らしく、且つ『花暦八笑人』の上の文句を含む部分が書かれたのは文政四年の頃であつて『心謎解色絲』より年代は後であるが、然し人水中に死して云々の言葉は以前からの言ひならはしであつたらしく、同樣に人を廿四時間假死狀態に陷れるといふやうな毒藥の考が東洋にもなかつたであらうか、私は寡聞にして知らないのであるが、若し「心の謎」がシェイクスピアに手寄らずに解けるものとしたら、この邊にその端緒が見出されるのではあるまいか。

なほ井原氏は前記の一文中において、近松の『釋迦如來誕生會』の中に、脚の肉を切つて秤にかけるところがあるのと『ヴェニスの商人』中の所謂人肉質入裁判とを比較して、何れも釋迦に關する印度の傳說がもとで、一方は波斯を經て歐洲に傳はり、他方は支那を經て日本へ來たものであることを述べられて居る。

南北の前記の戲曲が市村座で上演されたのが文化七年の正月であるから、それが書き下されたのはその前年であらう。文化六年はその前年長崎における英船フェイトン號の狼藉が原因となり、國防の動機から、幕府が長崎のオランダ通詞に英學の兼習を命じた年である。尤もそれより半世紀も前から長崎のオランダ通詞の或者が英語との多少の親みをもつて居た事は文化八年にできた日本における最初の英學書(寫本)たる『諳厄利亞(アンゲリア)國語和解』の序文によつても知り得るのであるが、日本の英學は先づ文化年間に愈々その緒に就いたものと言ひ得るであらう。然し初めはやはり蘭學者が英語を兼習したのであつて、シェイクスピアの名が初めて日本へ傳はつたのも蘭學者を通してゞあつた。

天保十一、二年にかけて幕府の天文方澁川六藏が譯出した『英文鑑』といふ英文典がある。是はリンドレ・マレ（Lindley Murray）の英文典を蘭譯から譯したものであつて、東京帝國大學の圖書館にあつたその寫本が、大正十二年の震災で燒失して以來、も早や再び吾々の眼に觸れ得ないものと考へられて居つたのであるが、其後澁川家になほ別の寫本があることがわかり、故大槻如電翁の斡旋によつて昭和三年十二月にその寫本の內容が謄寫版刷で六合館から百部だけ出版された。而してこの『英文鑑』こそシェイクスピアの名を含む日本における最も古い文獻であることが、公の場所で指摘されたのは昨年の秋の日本英文學會の大會における竹村覺氏の講演においてであつた。譯者澁川六藏が天保十二（一八四一）年の四月に幕府に献上したその下編卷之一第一章第八の中に Shakespeare の名が「シャーケスピール」と出て居る。なほ同じ場所にはミルトン、ポープ及び（Addisonの）エッヂソン（Sterneの）スチールン等も列擧されて居るが、譯文では是等の文人の特徵が皆作品の名とされて居り、シェイクスピアの場合はその de vindingrijke geest 即ち「創作力に富める心」が「デ、フィンディンクレイケ、ゲースト」書名といふやうに書かれて居る。

我が國の文獻中シェイクスピアの名前が出て居るもので、その次に古いのは、文久元（一八六一）年に、長門の溫知社で訓點を附して飜刻された漢譯本『英國志』である。この『英國志』は清國に渡來した基督教新教宣教師で英人の慕維廉（William Muirhead）が托馬斯米爾納（この人名は新村博士が想

像されて居る如く Thomas Milner であらう）の英國史を漢文に譯したものであつて、その第五卷の終にシェイクスピアの名前が舌克斯畢と出て居る。

次に明治になつては、先づ中村正直即ち敬宇先生の譯された『西國立志編』（官許明治庚午（三年）初冬新刻木平謙一郎藏版）が、シェイクスピアの名前を傳へるのみならず、短かい評傳とその作品の一節の譯さへも紹介して居る。『西國立志編』は言ふ迄もなく、Samuel Smiles の *Self-Help* を譯したものであつて、敬宇先生も表題に添へて原名自助論と說明されて居り、且つ先生の據られた原本が、一八六七年倫敦出版のものであつて、その翌年、即ち明治元年に先生が倫敦を去られる時、弗理蘭德（フリーランド）（Freeland）といふ人が送別のために贈つたものであることは、譯本の扉及び扉の裏に記されて居る所から知ることができる。

先づこの譯書の第一編十二はシェイクスピアの評傳である。餘り長くもないので、敬宇先生の譯文と原文とを對照して次に記すことにしよう。但し『西國立志編』は、私の所には明治三年官許四年版もあるのであるが、後の版では、僅かながら、訂正もあるやうであるから、譯文は明治十年の版に據ることにする。

舌克斯畢（シェークスピーア）ノ事

英國詞曲ノ名家ナル舌克斯畢（シェークスピーア）ハ、元來何（イカ）ナル種族ヨリ出（デ）シヤ、ソノ說種々ニシテ定マラズ、然（レド

モ、卑賤ヨリ發達シタルヿハ疑ナシ、ソノ父ハ、屠者及ビ牧人ニシテ、舌克斯畢幼時獸毛ヲ梳スルヲ業トセリ、或ハ曰ク、舌氏始メテ鄕塾ニ在テ助敎タリ、後ニ或人家ノ書辨トナレリ、舌氏ハ、凡ソ所有人類ノ事ヲ知リタレバ「人間萬類ノ撮要錄」人間萬類ノ事ヲ一身ニ藏シタルユエカク比象シテイフト名ヅクルモ可ナリ、ソノ舟人ノ諺語ヲ用フルヿ切當ニシテ謬ラザルガユエニ、或ハ舌氏ハ必ズ水手タリシヿアルベシトイヘリ、ソノ著書中ニ、傳法敎師ノ事ノ委曲ヲ盡クシタレバ、舌氏ハ必ズ牧師ノ書班タリシヿアルベシト考論スルモノアリ、又ソノ馬ノ皮肉ヲ能ク分別定斷シタレバ、或ハ馬商ナリシトモ云ヘリ、」然ルニ、舌氏ハ切ニ優人ナリシナリ、ソノ年時ヲ送ル間、平生ノ試驗觀察ニ由テ得タル學識ヲ、盡ク戲曲ニ顯ハセリ、蓋シ舌氏ハ、深沈ナル書生ニシテ、勉强シテ業ヲ做セル人ナルヿハ疑ナシ、ソノ著ハストコロノ書、人心ヲ感ゼシメ、我英人ノ品行ヲ造リ成スノ益アリ、今日ニ至テ、盛ンニ世ニ重ゼラル、

この部分を私の手もとにある明治四年版と比較して見ると、第三行の「或人家」が四年版では「一人家」となつてゐる。且つこの十年版の「戲曲」及び「品行」の振假名はそれ〴〵四年版の「戲曲」及び「品行」を訂正したものであつて、細かな點迄譯者の注意が屆いて居ることを示してゐる。

右の譯文に對する英語の本文は次の如くである。

No one knows to a certainty what Shakspeare was; but it is unquestionable that he sprang from a

humble rank. His father was a butcher and grazier; and Shakspeare himself is supposed to have been in early life a wool-comber ; whilst others aver that he was an usher in a school, and afterwards a scrivener's clerk. He truly seems to have been "not one, but all mankind's epitome." For such is the accuracy of his sea-phrases that a naval writer alleges that he must have been a sailor ; whilst a clergyman infers, from internal evidence in his writings, that he was probably a parson's clerk ; and a distinguished judge of horse-flesh insists that he must have been a horse-dealer. Shakspeare was certainly an actor, and in the course of his life "played many parts," gathering his wonderful stores of knowledge from a wide field of experience and observation. In any event, he must have been a close student and a hard worker, and to this day his writings continue to exercise a powerful influence on the formation of English character. — *Self-Help*, chap. i.

以上の譯文と本文とを比較する時、吾人は明治の初年に全體としてこれだけの譯ができた事に先づ驚くのであつて、"not one, but all mankind's epitome" を「人間萬類の撮要錄」と譯せられたなどは實に巧である。但し「馬ノ皮肉」と譯された horse-flesh は若しその頃 *C. O. D.* でもあつたら先生は直ちに此處は「馬」の意であることを悟られたであらう。

次は第九編の三「職業ヲ務メ、兼テ文學ニ名ヲ得タル人ヲ擧グ」といふ見出しの章中に

舌克斯畢ハ、戯場ノ司長ニシテ、頗ル自ラソノ俗務ヲ料理スル「ニ誇シガ、ソノ歌曲ヲ作ル「ハ絶テ自負セザリシトナリ、

と出て居る。（この譯文は明治四年版も十年版も「戯場」の振假名に至る迄同じである。）但し是は原文中のシェイクスピアに關するもつと長い記事の初めの一文章を譯し、他は略したもので、原文のこの譯に對する部分は次の如くである。 Shakspeare was a successful manager of a theatre—perhaps priding himself more upon his practical qualities in that capacity than on his writing of plays and poetry.

次は「金錢ノ當然ノ用、及ヒソノ妄用ヲ論ズ」と題せられた第十編の初めに附せられた標語中のシェイクスピアの文句である。この編即ち原本の第十章にはバーンズ、シェイクスピア及びブルワ・リトンから引用された標語が冒頭に置かれて居るのであつて、其中のシェイクスピアからの引用句の譯は次の如くである。（この譯文も明治四年版十年版共に同じである。）

舌克斯畢ノ詩ニ曰ク、金錢ヲ借ル人トナル「ナカレ、又金錢ヲ貸ス人トナル「ナカレ、蓋シ人ニ金錢ヲ貸セバ、往々自己ノ損失トナリ、幷テ借ル人ノ損失トナル、而メ人ヨリ金錢ヲ借レバ、勤儉ノ鋒刃ヲ鈍ス「ナリ、

とあるが、是は『ハムレット』第一幕第三場中でポローニアスがフランスへ旅立つ我が子を訓戒する一節であつて、スマイルズの原本にはシェイクスピアの原文が次の如くに掲げられて居る。

Neither a borrower nor a lender be:
For loan oft loses both itself and friend;
And borrowing dulls the edge of husbandry.　——Shakspeare.

この原文と譯文とを比較して見ると、第一行と第三行は巧に譯されて居るが、第二行は市河博士が註されて居る如く「人に金を貸すと其貸金もなくし其友をも失ふ」の意に譯さるべきであつた。なほポローニアスのこの言葉の漢譯が明治七(一八七四)年石村貞一編の『泰西名言』(大阪、龍曦堂發行)の第十七丁の裏に載せられて居るとのことである。

次に同じく明治七年 *The Yokohama Punch* に掲げられたハムレットの有名な獨白のローマ字譯がある。是については先づ神代種亮氏が『明治文化』第一號(昭和二年十月發行)に「ハムレット獨白の日本譯」といふ題の下に紹介せられ、その後『英語と英文學』の坪内博士沙翁全譯記念號(昭和三年十一月發行)中において、同氏が重ねて說明されて居る。私はその *Yokohama Punch* 誌の實物はまだ見たことがないのであるが、この雜誌は美濃紙に筆蹟をそのまゝ印刷したものであるとのことで、チャールズ・ワーグマン(Wirgman)がその明治七年版に掲げたハムレット獨白の譯は、その寫眞版が神代氏の紹介の中に出て居る。それによつて見ると、譯文の上に丁髷姿に一刀を佩びた人物が思案に耽つて居る面もちで一室の中に立つて居るが、之は恐らくハムレットであらう。さうして其の向つて右

には片假名で「シバヰゴヤ」と記され、左には「シエクシピル」と記されて居る。又繪の上には Extract from the new Japanese Drama Hamuretu san, "Danumarku no Kami," proving the plagiarisms of English literature of the 16 Century と記され、さてその繪の下に記された譯は次のやうである。

Arimas arimasen are wa nan deska: —
Moshi motto daijobu atama naka, itai arimas
Nawa mono to ha ichiban warui takusan ichiban
Arui ude torimas muko mendo koto umi,
Soshte bobbery itashimas o shimai? Shindanji; neru,
Mada; sorekara, neru de hanashi mo yoroshi
Kokoro itai to issen mainichi bonkotz
Ushi otot'san arimas, sore wa dekimashta mono
Takusan skimashta, shindanji ; — neru;—
Neru! okata nise haikin ; sayo achira skoshi serampan;
Kara ano shindanji no neru, nani nise haikin dekimas
Kono nangai shindanji mono piggy shimashita,

Skoshi mata sinjo:

Vos valete, et plaudite

Anata sayonara, soshte te ponpon.

以上は『ハムレット』第三幕第一場中の有名な獨白の一部分の(逐語?)譯であるといふ見當はつくが、難解な日本語であるので、神代氏が漢字交り文に書き變へられたものを紹介して置く。但し特に解り惡い第三行以下を記す。括弧内の「羽」は"arrows"の譯として、私が當てゝ見たのである。

縄　物　と　は(羽?)一番　惡い　澤山　一番

或　腕　とります　向ふ　面倒　事　海

そ―して　*bobbery*　致します　お仕舞　死んだんじ　寢る

未だ　それから　寢る　で　話　も　宜し

心　痛い　と　一千　毎日　ボンコツ

うし　おとッさん　あります　それ　わ　出來ました　もの

澤山　好きました　死んだんじ　寢る

寢る　大方　贋　拜見　然樣　あちら　少し　セラムパン

から　あの　死んだんじ　の　寢る　何　贋　拜見　出來ます
此の　長い　死んだんじ　もの　piggy　しました
少し　又　進上

あなた　さよなら　そーして　手　ポンポン

但し譯者ワーグマンは、或はこの譯から想像されるであらうやうな無學な人ではなかつたらしい。今藤岡作太郎博士著『近世繪畫史』の三五三頁から三五七頁の第一行に至る間における彼に關する事項を抄錄すれば、先づ

「チャールズ・ワーグマン（Charles Wirgman）は英吉利倫敦府の人、はじめ武官の職にありしが、辭してロンドン・ニウス社に入り、安政年間その特派員として日本に來れり。屢々わが國の風景、風俗を寫して、畫報を怠らず。その技術甚だ優れたるものにはあらずといへども、わが國の人が直ちに西洋人に就いてその手法を傳へたるは、由一等がこの人に學べるより始まれり。ワーグマン横濱居留地に住み、わが國に留まること三十餘年、明治二十四年、五十七歳にして歿す。」とある。

ワーグマンから直接西洋畫の手ほどきを受けたその高橋由一（江戸の人）が後「遂に一家をなし、明治六年、日本橋濱町に天繪社（のち天繪學舍と改む）を開きて、子弟に教授す」るやうになつてから

は「名聲隆々として揚り、……川端玉章、荒木寛畝も、一時その門に入りて西洋畫を學べり」といふのであるから、即ちワーグマンは間接ながら日本畫家をも益するところがあつたのである。

なほ「ワーグマンに學べる……少壯なるものには、五姓田芳松、山本芳翠等あり。……芳松は……幼にしてワーグマンに就いて神童の名あり、……山本芳翠も……ワーグマン來るに及びて、就いてこれに學べるなり。」とある。

是を以て觀れば、蓋しワーグマンの日本に對する貢献は英學史上のものであるよりも、寧ろ日本洋畫史に屬す可きものゝやうである。なほハムレットの獨自の邦譯には「新體詩鈔」中に含められた、當時としては實に立派な二つの譯もあるが、是は數年後のものであるので、後に紹介することにしたい。

次に明治八(一八七五)年に『西洋歌舞伎葉武烈士』即ち『ハムレット』の院本風の飜案が『平假名繪入新聞』(東京發行)に掲載され、その飜案者は、後で引用しようと思ふ河竹繁俊氏の言葉によれば、假名垣魯文であつた。なほ河竹氏によれば、魯文のこの飜案を後で「默阿彌の高弟なる故三代目河竹新七(先代の竹柴金作)氏」が再び飜案したものが『葉武列士巧演劇』(明治二十二年八月の作としてあるとのことである)となつた次第であるが、この飜案劇と前の魯文の飜案との關係につき、河竹氏が、前記の『早稻田文學』沙翁記念號(大正五年四月發行)に寄せられた「沙翁と默阿彌」といふ私共に

取つて非常に有益な資料を含む一文中に於いて、述べられて居る要所をそのまゝ紹介すれば次の如くである。「私が此の翻案を此度親しく讀むことの出來たのは、當代竹柴金作氏の好意によつてであるが、同氏の直話によれば、其の材料を『繪入新聞』に連載された假名垣魯文の院本風に翻案した『ハムレット』に得たといふことである。」

なほ河竹氏は同じ一文中において『葉武列士巧演劇』の構造を數頁に亘つて紹介されて居り、且つ同じ文中の終の附言において、魯文翻案の『葉武列士』は、默阿彌の手記『ハムレット』の梗概（後で紹介する）と共に、福地櫻癡居士から、恐らく同一の機會に、其の筋を得られたものであらうとの想像を述べられて居る。

明治十年には慶應義塾出版社發行の『民間雜誌』（毎日曜發行）の九十八號（明治十年十二月三日發行）とその次號に亘つて、『胸肉の奇訟』が掲載された。是は『マーチャント、オヴ、ヴェニス』の飜案であるが、譯者の名はなく「英國沙士比阿小說の飜案」と旁書してある。私は京都帝大の圖書館で九十八號を見たのであるが、場所も日本に移し、人名も全然日本名に書きかへて、話の筋を飜案したものである。即ち場所は堺の浦、堺の問詰所となつて居り、アントーニオは松枝節之助、バッサーニオは室野梅次郎、ポーシャは住吉の豪家の女清香、シャイロックは慾張頑八といふ調子である。九十八號には裁判の場の挿畫があるが、ポーシャは烏帽子をかむり、シャイロックは丁髷姿で、傍に出刃庖

丁を置いて居る。さうしてこの繪の向つて左肩に「畫の譯は次號に詳なり」とある。この九十八號に掲載された分は『愛書趣味』第四年第一號（昭和四年一月發行）に轉載されて居るが、それにはかなりの遺漏がある。今私の手許にある『民間雜誌』の本文の寫しに依つて、（變體假名は普通に改め、假名遣の誤謬はそのまゝ）初めの方を紹介すれば次の如くである。但し句讀點が無いので、便宜上大體『愛書趣味』の切り方に從つて置いた。

今は昔、堺の浦に松枝節之助と云ふ富豪家ありける。其父は原と關東の某侯に仕へ、勳功も殊に多かりければ君の覺一と方ならず、頓に出身したりしかば、高木風に惡まるの喩、忽ち金を爍かす衆口の讒舌に逢ひ、今は彷徨優游して生面〳〵と屬鏤の劍を賜わり、死後の恥辱を貽さんより、寧ろ彼の功成身退きたる五湖釣翁の迹に倣ふに如かんやと早くも心に定め、富貴爵祿は視て敝履の若く棄て去て、鳥が啼く吾妻の里を後に見て、遙々と堺の浦にたどり來て、心を貨殖に用いしかば、忽ち陶朱公にもおさ〳〵劣らぬ富をぞ致しける。節之助は生來武を喜み義俠の心ありて、弱きを助け强きを拉き、善に與し惡を懲すの性なれば、之が助けを被りて九死に一生を得し者も多かりけるそが中に、爰に同じ郷に室野梅次郎は松枝が親しき友なり。早く父を喪ひ總角の頃より、住吉に世を遁れたる軍學者、白嶺臥雲齋が門に入り、雪宵霜晨も厭はずにいみじく勉め學びてければ、年齡まだ弱冠なれども才學凡ならず、臥雲齋も末賴母しき者とぞ思ひける。其母は去る年より重病に

臥しければ、梅次郎は大に悲しみ、親ら湯藥に侍し、異國の妙藥も秘法の良劑も家資を捐て、購ひ、永の月日をまめ〳〵しく孝心を盡せども、天命如何ともなし難く、終に果敢なき人となりぬ。かゝる薄命の重りて、積る負債に迫られて、詮方なくも松枝に此事を談ぜしかば、素より義氣ある松枝は輙く諾ひしが、折節都合の惡しければ、我持船の遠からず北國より入津すべきを心當て、三千兩の大金を富商欲張頑八より、三十日期限にて借受けたしと掛合ひしに、頑八は何か思ふ子細ありけん、色和らげて申す樣、北國よりの入船を疑ふて言ふにはあらねど、願ふは和殿胸肉の一斤を證文に抵當として給べと、聞て松枝非道と思へども、强慾の頑八に向ひ、情理を說くも詮なきを知れば、直ちに望の通り證文認め其金を借り受け、室野に渡し一時の危急を救ひける。（以下略）

次は河竹默阿彌手記『ハムレット』の筋書である。是は河竹繁俊氏が前記の「沙翁と默阿彌」中に述べられて居る所によると、大正三年の末同氏が默阿彌の傳記を調べられるに就て、古い書き物を入れた箱の中から發見されたもので、是について同氏は以下のやうに記されて居る。「私の推測によると確かに明治十一年か十二年の手書であると思ふ。年代を證明するの理由は二三にとゞまらぬが、今はその煩を避ける。而して今一つの推測はその梗概が十中八九は福地櫻癡居士から得たものであらうと考へられることである。」さうしてなほ同氏はその「筋書の第一頁に別人の手跡で、ハムレットを里見義豊、前國王を里見義堯、現國王を同實堯、洞長（ホレーショのこと）を正木大膳、宮內卿（ポロニ

ヤス）を眞里谷信昭と書いてある」こと、又それが「多分福地氏の手跡であらうと思はれる」ことを記したあとで、『ハムレット』のその筋書の全部を掲出されて居る。それは一頁十六行、一行大抵四十六字詰の印刷で正味五頁半に亘るものであるが、その初めの方だけを此處に記して見よう。（六號活字の説明は河竹繁俊氏の挿入である）。

第一幕　（幕とあるべきが原文では場となつてゐる）。㈠城外。武官ベナルド、マルセリス、洞長三人先帝の幽靈に逢ふ。㈡御殿、宮内卿ホロニス「息レイルテス、王即位の祝に來りし事。「親王ハムレット一人喪服にて出る「兄嫁と夫婦になるも國を納める爲と現國王ハムレットにいふ。「レイルテス即位が濟めばフランスへ武術修業に行きたいと願ふ「ハムレットは今帝コロデエスと我母と夫婦になりしを心で憂へる「后は年四十位、みな〳〵入る、「ハムレット一人殘り、昨日までは姉と言ひしを今日は妻となせしは、國の仇我身の恥なりと歎く。「幕明きの洞長、マルセリス、ベナルド三人來る「此ホラテウはハムレットと兵學寮に一所に居た所、先帝の葬式を見に來た「兵士を連れて來たはどういふ譯だと聞く「幽靈が出るといふ故見屆けに參つた。「いづれへ出る「毎夜一時頃に御靈屋の邊りへ。よく〳〵見れば先帝のお姿故何御用あつてと聲かくれどお答なく、いかりの眼さも恐ろしき御姿にて二三度お通り故、聲をかけれど答なし、この事を申上まする。「親王今宵は我自ら行つて見よう、他言致すな。（以下略）

默阿彌が櫻癡居士からリトン郷の小說の話をきゝ、それを翻案した『人間萬事金世中』といふ三幕物の喜劇は明治十二年に新富座で演ぜられて居るが、『ハムレット』の方は、如何なる故か默阿彌はその梗概を手記したのみで、芝居にはせずに終つた。

なほ斯る早い頃にシェイクスピア物の梗概を書き記したものに筠莊居士（和田垣謙三）の漢譯『李王』がある。是は『キング・リア』の筋の大意を漢文で書いたものであるが、私は早稻田にありと聞くその實物をまだ見る機會を有しないで居る。然し是に關しては、故和田垣博士の助手を數年務められた武者金吉氏が『英語青年』の第四十三卷第十二號（大正九年九月十五日發行）に寄せられた「日本で初めて譯された沙翁」なる一文中において、その由來を說明され、且つ譯そのものゝ一部をも示されて居る。尤もこの漢譯については、早くも坪內博士が、その『マクベス』の譯の附錄として添へられた「日本に於ける沙翁研究、飜譯、飜案及び上演の略誌」（大正五年二月初旬稿）中に、「沙翁の飜譯を試みた卒先者は、和田垣氏の話に據ると、同氏らしい。氏は明治十二年コレラ病流行の年に、其學友四五名と、避暑を兼ねて、之を箱根に避けて、七八兩月の間に、漢文で『リヤ王』を譯し、『李王』と題としたことがあるさうだ」と記されて居る。さうして是に對して、和田垣博士は、武者氏も紹介されて居るやうに、大正五年のシェイクスピア歿後三百年記念講演會の席上で次のやうに述べられて居る——「實は當時一方には沙翁物を學び、一方には故中村敬宇先生に就て左傳を學んで居つて英文の意味と共に

漢文に一種獨特の妙所あるを知つて、自面の一書生英漢兩兎を追ひつゝ六十日の夏の日の消光の具に供せんが爲めにやつた仕事である。殆んど四十年後の今日舊稿を開いて見ると、驚くのは其の大慾、根氣位である。もとより世に示すべき爲めではなく、今讀んで見るとチンプンカンに過ぎない。唯一の誇とすべきは、世の所謂才子膚を眞似ずして努力を惜しまなかつた、唯この一事である。」(和田垣博士遺著『逍遙遊』參照)。以上の演說の文句の中に「當時一方には沙翁物を學び」とあるのは、其頃和田垣氏が東京帝國大學の出身たる東京大學で米人教師ウィリアム・ホートン(Houghton)のシェイクスピアの講義を聽かれたのを指して居るものと思はれる。なほ武者氏は和田垣博士の遺稿を整理中に筐底から發見された一紙片、初めに「十二年二月大試業爲級長如故」と記され、それにつゞいて東京大學における教科書講義題目樣のものが列擧してあるものを紹介されて居るが、其中にはシェイクスピア關係では「ハムレット論」と「李王傳」がある。和田垣氏は翌明治十三年に、井上哲次郎、岡倉覺三の諸氏と共に東京大學の文學部を卒業されたのであつて、同氏等八名は同文學部第一回卒業生であつた。さうして『李王』を譯された明治十二年には和田垣氏は數へ年二十歲であつた。

鈎莊居士『李王』の由來は以上の如くであるが、其の稿本そのものには、武者氏の報ぜらるゝ所によれば、その始に「明治十二年七月十四日於箱根山中塔之澤玉之湯」とあり、その終に「七月二十八日堂ヶ島近泉樓」とあるとの事である。即ちこの『李王』は、よし添刪は後でされたとしても、この二

つの日附の間約半月の間に一應書き終へられたものであらう。さうしてその稿本そのものは「半紙判縦罫の日本紙百枚程綴ぢた帳面に、片端から毛筆で譯しつゝ書いて行かれたもので、朱で夥しい添刪が施してある。紙數五十五枚、字數凡二萬二千三百字とは博士自ら卷末に記して居られる所である。黄色の表紙には左の上部に「李王」右の下部に「和筠莊」と記し、表紙の裏面には「筆久斯波著筠莊居士譯」とある。」なほ卷末には、此の頃から既に和田垣氏一流の茶氣を發揮して、「書林駿河臺西紅梅町十九番地一而己精舍丸屋善八、福澤諭吉」と記されてあるとの事である。

さうして其の内容は「譯」とはあるものの、前記の通り「キング・リア」の筋のあらましを傳へたものであつて、武者氏はその開卷第一、二頁の部分を紹介されて居るが、私はそのまた初めの方を次に掲げて見よう。即ち第一章第一節　李王分國　謙德諫言の初めの部分である。

李王者英國之王也。資性聰明。及王即位百廢共起。惡弊立止。民各樂其業。王有女三。曰權寧。曰禮岸。曰孝清。三女皆美。爲父所愛。而王特愛孝情。及王年漸老。欲三分其國與三女。而己則優退自適。以送餘年。一日召三女。謂曰。父已耄矣。亦不能見國事。而汝等今既笄。早晩當嫁也。女等嫁之後。老父欲高秋肆志以樂餘年。女等之中愛吾最深者誰乎。長女權寧應語誓天曰。女愛慈父之情。非言語之所能盡。雖自愛之情深。何若愛慈父情乎。王聞之說曰。善哉女言也。向者亞公請女。某地某郡吾其授之女與亞公。子孫繁昌。傳之無窮。謂二女禮岸曰。女昆王之婦。女愛父之情奈何。

禮岸亦誓天地答曰。女所欲言者。賢姉既言焉。吁天下人多。而何人有貴於慈父。王亦悅曰。某地某境此女之有也。言未終。王前膝道三女孝清曰。女我愛女。佛王莫伯欲爭而得女矣。女能發好言。以得勝姉君。女有何言。孝清曰。無矣。王驚曰。吁此何言也。女其再試之。孝清沈思久之徐而答曰。女欲盡當盡而已。

以上『李王』に就て述べた序に米人教師ウィリアム・ホートンのことを記したが、明治十年に開成學校が東京大學となり、初めて文學部が設置せられた時以來明治十五年迄、この米人教師が同學部で英語、英文學を教へたことは既にかなりよく知られて居る事實があつて、是迄同氏は我が國においてシェイクスピアを講じた初めの人といふやうに普通考へられて居たが、かなり以前に京都の重久氏から貰つた手紙の中に、日本でシェイクスピアを講じたのはホートンより英人デェイムズ・サマーズ(James Summers)の方がさきのやうに思はれるが、といふ意味のことが書かれてあつた。然るに其後私の手に入れた開成學校明治九年の一覽はそれを裏書きするやうに思はるゝ。その一覽といふのは白のクロスの裝釘の四六版であつて、右から開いて約半分は日本語の一覽で、左から開けば英文一覽である。さうして表紙には、日本語に對する方には「東京開成學校一覽明治九年」とあり、英語に對する方には次の如くにある——THE / CALENDAR / OF THE / TOKIO KAISEI-GAKKO, / OR / IMPERIAL UNIVERSITY OF / TOKIO. / FOR THE YEAR / 1876.

日本語及び英語一覽の內容は同じであるから、今日本語の部によつて記すと、先づ「教員」の中に「英文學及論理　ジエムス、サンマルス　英國」なる一項があり、普通科課程中に「英語學」が出て居る外、「諸學科要略」第一英文學、修辭學、論理學の條下の「教科書目」中に「シェークスピール」の一項がある。是等から想像するとヂェイムズ・サマーズはホートン以前に、既に我が國においてシェイクスピアを講じて居たものと思はれる。但しサマーズが何時頃から開成學校で教へて居たか、文部省第一年報(明治六年)開成學校の條中「外國教師」中に「文學教師英一人」とあるのが、サマーズであるか、私にはまだ調べが屆いて居ない。

なほシェイクスピアを講じた初めての日本人は高田早苗博士であるらしい。同博士がまだ東京大學文學部の學生であつた時——和田垣氏が三年生の時高田氏は一年生であつて、(三年生のことは既に述べたが)當時の二年生中には都築馨六、嘉納治五郎氏等が居られ、一年生中には坪內雄藏、有賀長雄の諸氏が居られたとの事である——同氏は本郷の進文學社といふ學校で內職に先生をして居られ、晝間ホートン先生から教はつたシェイクスピアを右から左へ夜教へられたとの事である。進文學社からは三上參次博士や原嘉道博士などが出られたが、此處で高田氏のシェイクスピアの講義を聽かれた人の中には、後新聞記者として有名になつた朝比奈知泉氏等も居られたとの事である。この事については高田博士自身の話が、『日本シェイクスピア協會會報』第一號(昭和五年十月發行)に出て居る。

市河三喜博士と山口武美氏共編の「日本シェイクスピア書誌」（研究社發行『英語研究』の昭和六年三月號以來掲載されつゝあるもの）によれば、前記明治三年新刻官許の『西國立志編』中におけるシェイクスピアの評傳の譯は別としても、明治十二年吉田五十穂譯纂『伊呂波分西洋人名字引』（東京吉田氏發行）には二一四頁から二一五頁にかけて「シエークスピーア（ウイリヤム）」と題して、傳記の紹介があるとの事であり（この本は翌年改譯されて『西哲小傳』として同じく吉田氏が發行されて居る）、明治十三年乾立夫譯『泰西名士鑑上編』（東京、小泉堂發行）には二二一頁から二三七頁に亘つて「沙士比阿傳」と題する一項があるとの事であるが、是等の傳記の據つた原本は今の所不明である。

なほ前記の「日本シェイクスピア書誌」の示す所によれば、同じく明治十三年『伊勢古事記日曜叢誌』（三重、雙鑑社發行）の第十七號に『ローミオー、アンド、ヂューリエット』に就いて、十二、三行の紹介があるとの事である。

明治十四年には『東洋學藝雜誌』第六號に尙今居士（矢田部良吉）譯「ハムレット中の一段」が載つて居るとの事であるが、是は翌明治十五年に初版を出した『新體詩鈔』（丸屋善七發行）中に含められて居る。（私の所にあるのは明治十七年の再版であるが、）扉の右の部には外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎（但し原本では三名列記）同撰、初編とあり、表紙題箋の下部にも三人の姓名が列記してある。この詩集が當時新進のこの三人の學者によつてなされた一つの新らしい試みであつたことは、凡

例の書き出しの次の文句からも想像できるであらう——

均シク是レ志ヲ言フナリ、而シテ支那ニテハ之ヲ詩ト云ヒ、本邦ニテハ之ヲ歌ト云ヒ、未ダ歌ト詩トヲ總稱スルノ名アルヲ聞カズ、此書ニ載スル所ハ、詩ニアラズ、歌ニアラズ、而シテ之ヲ詩ト云フハ泰西ノ「ポエトリー」ト云フ語即チ歌ト詩トヲ總稱スルノ名ニ當ツルノミ、古ヨリイハユル詩ニアラザルナリ、

此の詩集の中には創作も含まれて居るが、多くは英詩の譯であつて、前記尙今居士のハムレットの獨白の譯の外、なほシェイクスピアの文章の譯を含んで居る。先づ內容の一般を示すために目次を引用すれば次の如くである（次の雅號中尙今は既に述べた通り矢田部敎授であり、丶山は外山敎授、巽軒は井上敎授である。）

ブルウムフィールド氏兵士歸鄕の詩（丶山仙士）
カムプベル氏英國海軍の詩（尙今居士）
テニソン氏輕騎隊進擊の詩（丶山居士）
グレー氏墳上感懷の詩（尙今居士）
ロングフェルロー氏人生の詩（丶山仙士）
玉の緒の歌（巽軒居士）

テニソン氏船將の詩（尙今居士）
拔刀隊の詩（丶山仙士）
勸學の歌（尙今居士）
チャールス、キングスレー氏悲歌（丶山仙士）
鎌倉の大佛に詣で丶感あり（尙今居士）
高僧ウルゼーの詩（丶山仙士）
シャール、ドレアン氏春の詩（尙今居士）
社會學の原理に題す（丶山仙士）
ロングフェルロー氏兒童の詩（尙今居士）
シェーキスピール氏ヘンリー第四世中の一段（丶山仙士）
シェークスピール氏ハムレット中の一段（尙今居士）
シェーキスピール氏ハムレット中の一段（丶山仙士）
春夏秋冬の詩（尙今居士）

念のために記して置くが、巽軒居士の「玉の緒の歌」はその直ぐ前の丶山仙士のものと同じく、ロングフェローの *A Psalm of Life* の譯である。

以上の中シェイクスピア關係のものだけに就いて述ぶれば、先づ「高僧ウルゼーの詩」であるが、是は『ヘンリ八世』第三幕第二場三五〇—三七二行の譯であつて、

おさらばさらばいざさらば　再び會はぬ暇乞ひ
榮譽に永く別るべし　人の習は皆都て
利運の端の芽出しなば　八重咲きにほふ花盛り
位に位重なりて　榮曜榮華を極むれば
愚な胸に思ふ樣　運命强く願かなひ
天にも登る龍なりと　悅びいさむをろかさよ

云々といふ調子である。

その次は「シェーキスピール氏ヘンリー第四世中の一段」である。この初めにはは し書きやうのものが附いて居て、やはり七五調で、ヘンリー四世の生涯を概說し、「此一篇はこれぞこれ　其有樣をうつしたる　シェーキスピールの名作ぞ」云々で結んであるが、是はゝ山仙士の作であると思はるゝ。さうして其後に

最と下賤なる我人の　枕を高く高いびき
今しも眠る其數は　幾千萬かあるならん

あゝ美し美し眠の神よ眠り神

云々と譯されたシェイクスピアの本文は『ヘンリ四世』第二部の第三幕第一場四――三一行、即ち不眠の苦痛を歌つたものである。

それから最後は『ハムレット』第三幕第一場のハムレットの獨白で、是は矢田部、外山兩教授が各自に譯されて居るが、その初めの方を對照すれば次の如くである――

ながらふべきか但し又　ながらふべきに非るか
爰が思案のしどころぞ　運命いかにつたなきも
これに堪ふるが大丈夫か　又さはあらで海よりも
深き遺恨に手向ふて　之を晴らすがものゝふか
どうも心に落ちかぬる　扨も死なんか死ぬるのは
眠ると同じ眠る間は　心痛のみか肉體の
あらゆるうきめ打捨つる　是ぞ望のはてならん
アゝしぬ、ねむる、ねむる時　萬が一ゆめみるならば
ハアこだわりが有るやうぢや　（以下略）

是は尙今居士の譯であるが、丶山仙士の譯は次の如くである――

死ぬるが增か生くるが增か　思案をするはこゝぞかし
つたなき運の情なく　うきめからさめ重なるも
堪へ忍ぶが男兒ぞよ　又もおもへばさはあらで
一そのことに二つなき　露の玉の緒うちきりて
死んで眠りてそれぎりと　からきくるしき世の中を
さらりと去つて消え行くも　卑怯の業にあらぬかや
一眠りにてつもりこし　胸の焦れや現身の
萬の艱苦それぎりに　去りて去らるゝものならば
それにまされることなきも　（以下略）

なほ『新體詩鈔』の内容を取捨し且つ他の詩を加へた『新體詩歌』第一集（竹内隆信編）が同じく明治十五年に山梨の徵古堂から發行されて居るが、この方は私は未見である。

また宇田川文海か『アズ、ユー、ライク、イット』の筋を飜案した『四つの緒』が、明治十四、五年の頃大阪朝日新聞に連載されたとのことであるが、私は是も未見である。

明治十六年になると、シェイクスピアの一つの劇全體を日本語に原文から譯出した最初のものたる河島敬藏翁の『歐洲戲曲ジュリアス・シーザルの劇』が立憲政黨新聞に連載されて居り、この河島翁につい

ては最近竹村覺氏が『英語研究』第二十四卷第十號（昭和七年一月一日發行）に寄せられた「シェイクスピヤ飜譯の嚆矢」及び『書物展望』第二卷第二號（昭和七年二月一日發行）卷頭の「河島敬藏翁」において委しく紹介され、翁は實に我が國においてシェイクスピアの全譯を企てた最初の人であることを詳述されて居る。なほ同じ明治十六年にはラムのシェイクスピア物語からの邦譯たる翠嵐先生譯述西基斯比耶叢書 No. 1.『佛國某州領主麻吉侯情話』（東京、春夢樓發行）及び井上勤譯『人肉質入裁判』（東京、今古堂發行）が出て居る。前者は『アズ、ユー、ライク、イット』、後者は言ふ迄もなく『マーチャント、オヴ、ヴェニス』の梗概である。さうしてこの中『人肉質入裁判』はかなり長い間、ラムの物語からのこの種の譯の初めのものと考へられて居たのであるが、（同年ではあるが）それよりも寧ろ翠嵐先生譯『麻吉侯情話』の方が先に出版されたであらうことを初めて發表されたのは、私の知つて居る限りでは重久篤太郎氏であり、同氏は『同志社文學』2（昭和三年五月發行）に寄せられた「明治初期沙翁邦譯考」（九頁に亘る一文）中において、その事に言及されて居る。

以上の次第で明治十六年迄來ると、日本におけるシェイクスピア紹介研究は愈々本舞臺に入りかけた感があるのであるが、紙面の都合もあるので、この稿は明治十五年迄を稍詳述したのみで段落を着けることにした。十六年以後のことはまた稿を改めて述べたいと思つて居る。（昭和七年二月九日稿）